



Title	サハとアイヌの口琴を巡る「音文化」の人類学的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	荻原, 小百合
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11039号
Issue Date	2013-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53195
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Sayuri_Ehara_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（文学） 氏名 荏原小百合

	主査	特任教授	宮武公夫
審査担当者	副査	准教授	小田博志
	副査	教授	佐々木亨

学位論文題名
サハとアイヌの口琴を巡る「音文化」の人類学的研究

審査の方法および経過

平成 25 年 1 月 25 日	第 1 回審査委員会	論文を審査委員に配布、日程調整
平成 25 年 2 月 18 日	第 2 回審査委員会	論文内容の審査、問題点の検討
平成 25 年 2 月 22 日	口頭試問の実施	
平成 25 年 2 月 22 日	第 3 回審査委員会	口頭試問の結果及び審査内容の検討 学位授与の可否判定
平成 25 年 2 月 23 日	第 4 回審査委員会	審査報告書（案）の作成と点検
平成 25 年 2 月 25 日	第 5 回審査委員会	審査報告書の確定

審査の要旨

論文内容の検討

口琴あるいは Jew' s Harp と呼ばれる、演奏者が口にあてて固定し、その端を指で弾くか付けられた紐を引くことによって音を出す楽器は世界各地に見られる。本論文は音大出身の演奏者でもある荏原氏が、アイヌのムックリとサハ共和国のホムスという、同じ構造を持つ口琴に関わる人々の実践にみずから参加し、それらを参与観察することによって詳細に記述したものである。また本研究は、固有の地域や民族文化の一部として音楽をとらえる研究や、従来の演奏者や音楽だけに焦点を当てた研究とは異なり、口琴に関わるネットワークを構成するヒトやモノのアクターを対称的にとりあげ、それらが音の世界を生み出す過程を内側から明らかにしている。さらに異なった歴史や社会的背景を持つ二つの楽器（鉄製のホムスと竹製のムックリ）が国や民族の枠を超えて出会った際に、どのように解釈され意味を持ち、どのような反応や共鳴を生じうるのかを、塘路のあそう会やサハの教育や演奏の現場、さらには国際的な口琴大会や万国博覧会で観察された豊富な一次資料を基に分析している。その際の分析枠組みとしては、社会、政治、歴史などの「音の全体」に着目するため川田順造が提唱した「音文化」概念を参照しているが、従来の文化概念の枠を出ない「音文化」概念では、グローバルな規模で接触し混淆する多様な音世界を分析するには限界があるため、その拡張を新たな理論的枠組みで試みている。そこで用いられる理論的枠組みは、多様なアクターが関係しながら出来事や社会秩序を生み出すというアクター・ネットワーク論（ANT）やアサンブラージュ論であり、さらには共働の音楽生成論である。

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の第一の成果としては、楽器演奏者でもある荏原氏が、北海道では実際にアイヌの口琴伝承活動である塘路標茶町のあそう会に参加し、またサハ共和国では音楽学校に長期間滞在して現地の音楽教育に従事する一方で、サハの研究者や演奏家だけでなく政治指導者や鍛冶屋などとも交流し、各地のホームスに関する活動に参加することで得られた一次資料の重要性が挙げられる。とりわけ、サハのホームスをめぐる資料の多くは、外部の観察者では得ることの困難なものであり、文化人類学だけでなく、民族音楽学、地域研究、ポスト社会主義研究においても本論文の資料的価値は高いものと評価される。第二の成果としては、これまで民族や地域文化の一部として取り上げられてきた文化相対主義的な人類学的音楽研究を批判的にとらえ直し、「音文化」論の限界を拡張するため、関係性に焦点を当てたアクター・ネットワーク論やアサンブラージュ論を用いている点が、これまで見られない新たな理論的試みとして評価される。第三の成果としては、アイヌやサハといった個別の民族音楽の研究にとどまるのではなく、同じ構造を持つ一方で異なった歴史的社会的背景を持つ二つの文化（楽器）が出会った際に、その接触領域でどのような反応や生成が見られるかという、きわめて現代的な問題を取り上げている点が挙げられる。また、これらの調査成果は、荏原氏がサハや塘路で築き上げてきた調査対象の人々との強い信頼関係に基づくものであり、「文化を書く」以降の民族誌批判に対する一つの方法論的モデルケースとしても評価される。

学位授与に関する委員会の判定

本研究は荏原氏の長期にわたる塘路とサハ共和国における調査研究の集大成であり、近年の人類学における理論的成果を積極的に用いた野心的な研究として理論面では評価される。また資料面でも、サハや塘路における長期間の参与観察で得られた、さまざまなアクターに注目した幅広く詳細な調査結果は、今後の地域研究や文化人類学研究において重要なものであるだけでなく、音楽学など他領域における研究においても高く評価されるものと考えられる。しかし、本論文では研究目的や先行研究であげられたポスト社会主義研究などの課題が事例部分で必ずしも明確に取り上げられていない点や、「音文化」論、アクター・ネットワーク論、アサンブラージュ論、さらには共働の音楽生成論などの分析枠組み間の理論的関連性が明確にされていない点など、理論と事例分析に若干の齟齬が見られる。しかし、これらの問題は、新たな研究動向を野心的に取り入れた結果でもあり、荏原氏自身が今後の課題として充分認識していることが口頭試問で明白となっている。したがって、これらの課題は荏原氏の今後の研究において解決されるものと期待され、本論文の価値を損なうものではないと判断される。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本研究を博士（文学）の学位を授与するに相応しいものとの結論に達した。